

配置薬に使用される生薬の特徴②

村上 守一

オウギ（黄耆） *Astragalus membranaceus* Bunge （マメ科 *Leguminosae*）

李時珍は『本草綱目』（1590）で「耆とは長（ヲサ）の意味であって、黄耆は黄色のもので補薬として長だからかく名けたものである。」と述べています。『神農本草経』（漢代）の上品に収載され、人参と同様または、それ以上の補気薬として古くから重用されたことが伺えます。蘇頌（宋代）は「八月にその根を採取するもので、その皮を裂けば綿のやうになる、これを綿黄耆といふのである。」と言い、柔軟で綿のような黄耆を上品としています。また、陳承（宋代）は「黄耆は元来綿上（山西省）の産を良とするところから綿黄耆といふのであって、その物が柔靱で綿のやうだからいふのではない。」とも述べています。語源の違いはありますがどちらも綿黄耆を上品として扱っています。

黄耆はマメ科ゲンゲ属のキバナオウギ（*A. membranaceus*）とナイモウオウギ（*A. mongholicus*）の2種を原植物としています。中国では主に内蒙古、山西、黒龍江、河北省等で生産され、上述の山西省沁州綿上産の綿黄耆や陝西省同州白水産の白水黄耆が良品のものとされ、質が柔靱で皮の色が微黄褐色、中が白色のものです。他に赤水黄耆、木黄耆、土黄耆等がありますが、いずれも品質がおちます。

日本では江戸時代に国産の黄耆が探されたようで、ゲンゲ属のモメンズルやムラサキモメンズル等が試験されたようです。特に「加州白山、越州立山、和州金剛山より出す耆根、柔にして味甘し」と記されている種はキバナオウギの変種、タイツリオウギ（*A. membranaceus* var. *obtusus*）と推測されます。名前の由来は鞆果にあります。1 cm程の柄があり、長さ2~3 cm、幅1~1.5 cmで大きく膨らんで下垂する鞆果の様子が数匹の鯛を吊り下げたように見えるためです。キバナオウギやナイモウオウギの鞆果も同様です。

植物の特徴

キバナオウギ 中国北東、華北、四川省、蒙古、ロシア、朝鮮に分布し、草竹1 mにもなる大型の多年草。夏に淡黄色の小花を総状に腋生します。鞆果は膜質で膨らみます。

ナイモウオウギ 中国北東、華北、蒙古、ロシアに分布し、キバナオウギに比べて茎は倒伏しやすく、小葉は丸く小さい。



キバナオウギ



ナイモウオウギ

生 薬

秋に掘取り、水洗後分枝根を取除き、陽乾。根が太く、長く、綿質で甘いものが良品。



黄耆

成 分

フラボノイド（ホルモノネチン、アストライソフラバン等）、サポニン（アストラガロシド、イソアストラガロシド等）

薬効および使用法

強壯、利尿、止汗、血圧降下、排膿薬として黄耆建中湯、十全大補湯、防己黄耆湯等の漢方処方に配合されます。